



Title	太宰治『斜陽』の直治とはいかなる人物か
Author(s)	片山, 晴夫
Citation	語学文学, 39: 99-106
Issue Date	2001
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8327">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8327</a>
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

# 太宰治『斜陽』の直治とはいかなる人物か

片山晴夫

## 一 はじめに——鍵は直治にある

太宰治の『斜陽』（昭和二二年七・八・九・一〇月号の「新潮」に連載、同年一二月単行本として刊号）は、何故今も多くの読者をつかんで離さないのか。或は、『斜陽』はどうして戦後文学の代表作として語り評されるのか。人気作家の太宰治が発表した作品であるからか。はたまた趣向が秀れていて、その語り口が魅力的であるからか。「斜陽族」という流行語を生み出す源となったからか。本論では、その鍵が直治にあることを論証する。作品中に「夕顔日誌」（第三章）と、第七章の「直治の遺書」がなかったならば、『斜陽』は今日まで現状のように読み継がれることはなかったであろう。

## 二 研究の現在——「直治」論瞥見

まず、太宰治の研究の現状について、木村小夜氏は次のように述べている。

常套的な概念の枠組だけで素朴・粗雑に作家と作品について語

る段階では最早ないことを、先行研究は十二分に示しているよう。むしろそうした枠組から我々の読みをほみ出させるような相対化、安定した物語からの逸脱の契機を予め内包しているのが太宰文学の特質である、との認識が共有されつつある。

（中略）

言葉と思惟の一体化や他者へ向かう言葉の自明性への懐疑といった問題から出発したこの作者と作品との関係に対して、我々がさらに研究という立場からどのような言葉を与えていくことが可能なか——先行研究の指し示す現在の中心的課題を、例えばこう要約することが出来るのではないか。既に発見されてきた太宰の独自性を殺さず、しかも決して恣意的にならぬ読みの可能性は、今後になおも託されている（注1）。

本論が、もしも木村氏の言う「常套的な概念の枠組だけで素朴・粗雑に作家と作品について語る」ものであったとしたら遺憾の極みである。「むしろそうした枠組から我々の読みをほみ出させるような相対化、安定した物語からの逸脱の契機を予め内包している」ところの「直治」像の構築が本論のねらいであり、「既に発見されて

きた太宰の独自性を殺さず、しかも決して恣意的にならぬ読みの可能性」の模索こそが、本論で論証しようとするところである。

『斜陽』においては、「お母さま」「かず子」「上原」といった人物たちも、それぞれ輝きを放ち、鮮かな個性を見せている。「ほんものの貴族」として語られ、やがて没落の中で死んでいく「お母さま」。彼女は、戦後の成金たちの「成り上がりぶり」と、上層階層たらんとして、にわか仕込みの「礼法」を身につけようと心を砕くところの戦後の新興勢力の醜悪さを撃つ役割を果たしている。拝金主義とでもいうべき陥穽にはまりこんでいく人々や、便乗主義に囚われている人々の横面をしたたかに撃つ役割を与えられた人物なのである。一方、滅びに傾斜しながらも、今日いうところのシングル・マザーとして戦後を生きることを決意し、「道徳革命」をやり抜こうとする「かず子」は、男性たちが始め、敗戦という結果で終わった戦争の中でその身を翻弄され、戦後を生きぬいていかねばならぬ若い女性たちに一つの方向性を示唆しているといっている。作品中に、ローザ・ルクセンブルグの名前が出てくるのは、けだし故なしとしない。勤労働員された女子学生たち、或は戦争未亡人たちにとつて、「かず子」は、戦後の日本社会を生き抜いていく上で、強い影響力や感化力は持たないまでも、一つのモデル（見本）としての役割を持っていたといえよう。また、上京青年の末路とでもいうべき境涯に身を置いている「上原」は、日本の戦後を「黄昏」と評して止まない。戦後の成金たちを含む拝金主義者や便乗主義者たち、或は権力にとり入って自己保身を図り、やがて勢力を伸ばしていこうとする人々の動きが、上原にとつては日本の「黄昏」の景を

思い浮かべるのに十分な現象と映ったのであろう。

それでは、直治についての二つの先行研究を次に掲げる。

#### 〈饗庭孝男氏〉

太宰のラディカルなダダイズムの代弁者ともいうべきかず子に対して、復員してきた弟の直治はどのような意味を与えられているだろうか。

戦争から復員してきた人間というのは一度日常性から出、戦争という極限的状态の中に生き、人間性のあらわな部分を見てしまった者である。死への予感に生きつづけたために、そこから生を考えるとこの習慣をなかなか失うことのできない人間である。一度地獄を見てしまったものは、あらゆる事柄が全く生ぬるく映じると言つてよい。したがって復員者の一側面は、戦後久しく「無法者」的な目でみられることが多かった。

#### (中略)

彼(直治・引用者注)は復員してくると、東京で上原と一緒に飲みまわり、なかなか家へ寄りつかない。しかし、戦前、麻薬におぼれ、また、ある洋画家の妻を好きになつてつらい思いをしたことがある。ある意味で戦後の復員者の本質的な無法な部分を彼はもっているといえるが、そうした時代の子であると同時に、「強者」とは対極的な「弱者」の思考をもっている点が三島のいだけ青年像と異なっている(注2)。

このように考えてみると、直治も、母やかず子と同じように「滅び」の概念を共有していると言うことができよう。母は、ただ純粹にそれを生き、かず子は激しく、そして直治は錯乱によってそれを生きた違いはあるとしても、二者がひとしく「滅び」をもっていたことには変わりはない（注3）。

#### 〈中村三春氏〉

直治はなぜ死んだのか。遺書を再読しても、その答えは容易に得られない。「生活能力」がないというのが、その直接の理由のようだが、「ひとのごちそうにさへなれないやうな男が、金まうけなんて、とてもとても出来やしない」というのは論理が飛躍している。「生活能力」のないことと、生の意志のないこととは別である。「おさん」の夫は心中したが、「ヴィヨンの妻」の大谷は生きていた。この遺書は死の理由に関しては説得的ではないが、たぶん、説得的である必要はないのだ。新たなコミュニティに加入するイニシエーションの失敗を、自殺という形象によって呈示することが、その物語効果上の意義なのだろう。かず子と違って、直治は革命家ではなかった。新たに帰属すべきコミュニティを形成しえなかったからこそ、彼は自殺を選んだのだという脈絡である（注4）。

饗庭氏は、まず「戦争から復員してきた人間」の類型について述べ、その枠組の中で、直治を「時代の子」であり、「弱者」の思考をもっている「青年であると述べている。確かに自らを殺すという

最期を選びとっているのであるから、直治は「弱者」の思考をもっている」と評されても致し方ないであろう。「滅び」の概念を母や姉とともに「共有」していたという指摘も、妥当な解釈といえる。

しかしながら、直治の中にある「戦後の復員者の本質的な無法な部分」は、彼の真面目な、純粹さを貫こうとする心とつながっていることを見のがすべきではあるまい。直治は戦時中でもそうであるが、戦後においても、やすやすと日本の社会にとけ込めなかったし、「軍国主義から民主主義へ」と自らの生き方を変えることができなかったのである。そこに彼の真面目さや純粹さを貫こうとする心があつたといえる。無器用なほどひたむきであつたともいえるし、無反省かつ無節操な転身、或は戦後の日本社会への軽薄な同化を拒む心があつたといえる。

また、中村氏は、直治は非論理的思考の持ち主であり、「新たに帰属すべきコミュニティを形成しえなかったからこそ、彼は自殺を選んだのだ」と述べている。中村氏のこのような指摘は、確かにその通りであるといえよう。しかし、ないものねだりともいえる。非論理的思考の持ち主という読み解きはまだしも、「新たに帰属すべきコミュニティを形成しえなかったからこそ、云々」というのはどうか。人が「新たに帰属すべきコミュニティを形成」していくということは、戦後の混濁した、しかも新旧勢力が入り乱れて大混乱を生じている日本社会を生きのびていくこととともに大変な力技であつたはずである。「新たに帰属すべきコミュニティ」という概念を、新たに家庭をつくることを含むとしても、直治にとっては至難

の技であったと解釈する方が穏当であろう。

以上、饗庭氏と中村氏の直治論を考察した。

ここで、饗庭氏の「戦後の復員者の本質的な無法な部分」という指摘について、再び考えてみることにする。

飯島耕一に「他人の空」という作品がある。

#### 他人の空（注<sup>5</sup>）

鳥たちが帰って来た。

地の黒い割れ目をついばんだ。

見慣れない屋根の上を

上ったり下ったりした。

それは途方に暮れているように見えた。

空は石を食ったように頭をかかえている。

物思いにふけている。

もう流れ出すこともなかったので、

血は空に

他人のようにめぐっている。

この作品の「鳥たち」とは、饗庭氏のいう「戦後の復員者」の喩そのものと解釈できる。そして、『斜陽』の直治は、「他人の空」へと帰ってきた「鳥たち」の一羽（＝一人）になぞらえることができる。また、饗庭氏のいう「復員者の本質的な無法な部分」とは、

「地の黒い割れ目をついばんだ」後に帰還して、「見慣れない屋根の上を／上ったり下ったり」して、「途方に暮れているように」見える「鳥たち」の姿に重ね合わせて読むことができる。「見慣れない屋根」が広がる風景は、戦前・戦中とはすっかり変わってしまった日本社会の暗喩であることは明らかである。「鳥たち」は、自分が降りていく場所がどこにあるのか、安心して降り立つことのできる場所がどこなのか、捜しても見つけられない。中村氏の言を借りるならば、「帰属すべきコミュニティ」が見つけれないのである。故に、「鳥たち」の「血は空に／他人のようにめぐっている」しかないのである。「復員者の本質的な無法な部分」の内面を表しているのが、「他人の空」の後半五行であり、「血は空に／他人のようにめぐっている。」の詩句であろう。そして、それは『斜陽』の直治の内面のありようにも通じているといえる。

このように、直治という人物像は、『斜陽』一篇の中でのみ留まるものではなく、昭和二十年代の文学の流れの中に位置づけることができるのである。

次章では、直治の持っている批評精神について考察する。そこでは、『斜陽』第三章の「夕顔日誌」の分析を中心に論をすすめていく。

### 三 「夕顔日誌」の直治

焼け死ぬる思い。苦しくとも、苦しと一言、半句、叫び得ぬ、古来、未曾有、人の世はじまって以来、前例も無き、底知れぬ地獄の気配を、ごまかしなさんな。

思想？ ウソだ。主義？ ウソだ。理想？ ウソだ。秩序？  
ウソだ。誠実？ 真理？ 純粹？ みなウソだ。

論理は、所詮、論理への愛である。生きている人間への愛では  
無い。

歴史、哲学、教育、宗教、法律、政治、経済、社会、そんな学  
問なんかより、ひとりの処女の微笑が尊いというファウスト博士  
の勇敢なる実証。

学問とは、虚栄の別名である。人間が人間でなくなろうとする  
努力である。

不良でない人間があるだろうか。

味気ない思い。

金が欲しい。

さもなくば、

眠りながらの自然死！

「夕顔日誌」の冒頭近くからの引用である。みられるように、戦  
前戦中の教育を受け学徒動員によって召集されて、「地の黒い割れ  
目をついばんだ」後、漸く復員してきた直治は、自分の生きている  
戦後という時代を、「古来、未曾有、人の世はじまって以来、前例  
も無き、底知れぬ地獄の気配」に充ちているととらえて、世を導く  
人々やジャーナリスト、インテリゲンチアたちに対して「ごまかし

なさんな。」と痛罵している。(注6)直治の胸底にあるのは、世を  
導く人々たちの発する言葉への不信と、彼らが数知れず重ねてきた  
「ごまかし」への憎悪である。かつて、戦地における敗北と撤退を  
「転進」と称したり戦場における死を「玉碎」などと呼んだ日本の  
指導者やジャーナリスト、インテリゲンチアたちに対して、「君た  
ちは未だ無反省、無節操なままに『ごまかし』の言葉をふりまき、  
多数の『人間』たちを過ちに引きずりこもうとしているのか！」と  
いう怒りと悲しみが直治の胸にあったものと思われる。此の世の中  
——日本の戦後の社会——が、かつてなかったような「地獄の気  
配」の真只中にあるという直治の認識の基底には、紛れもなくその  
ような怒りと悲しみがあつたといえる。

したがって、直治の痛罵は、真理と真実を日々追い求めるのが本  
務である学者やインテリゲンチアたちに対して、次のように向けら  
れる。すなわち、「論理」の追求は、「所詮、論理への愛」に偏っ  
ているのであり、この世の中をそれぞれ苦勞して生きのびている  
「人間の愛」へは向けられていない。「人間への愛」のために「論  
理」の追求がなされねばならぬのに、昨今の学者たちはその原点を  
忘却してはばからなくなっている、と直治は述べている。ゆえに、  
「学問とは、虚栄の別名である。人間が人間でなくなろうとする努  
力である。」という直治の主張は、アカデミズムのあり方への警鐘  
といえる。また、直治のこのような言説は、現代においても有効性  
を十分に持っているといえる。「論理」の尊重も、生きている「人  
間への愛」のためにこそ存在すべきであり、「虚栄」を求めるもの  
となつてはならないというのが直治の信条であつた。そこには健全

な、或は真面目で純粹な批評精神が息づいているといえる。

同時代に、中野重治の「五勺の酒」という作品が出た。昭和二二年一月である。その中で、中学校の校長である主人公が、日本共産党のあり方について、次のように述べている。

去年の八月十五日（終戦の日・引用者注）僕はぼんぼんといって泣いた。あるとき泣いたものうちいちばん泣いた一人が僕だろう。僕はかすかすの犯した罪が洗われて行く気がして泣けたのだ。あるとき僕は決してだまされたとは思わなかった。しかしあれからあと、毎日のようにだまされているという感じで生きてきた。元旦詔勅はわけても惨酷だった。僕らはだまされている。そして共産主義者たちがだまさせている。これが僕個人のいつわらぬ感じですよ。

（中略）

なぜ共産主義者がむかしその運動が思想運動といわれたことがあったのを忘れたかのように、国民の思想的啓蒙の仕事を原論の稀釈にこんなはまだ任しているだろう。（注7）

「五勺の酒」を発表した当時、中野重治は日本共産党の機関紙「アカハタ」の文化部長であった。したがって、「五勺の酒」に表れている共産主義者たちへの批判は、まさに自らに向けられたものでもあった。「共産主義者たちがだまさせている」、「国民の思想的啓蒙の仕事を原論の稀釈にこんなはまだ任しているだろう」等は、中野自身が当時感じとっていた疑問と課題であり、「夕顔日誌」の

言葉を使えば、生きている「人間への愛」を置き去りにして、「論理への愛」に執着して、「原論の稀釈」という「歴史、哲学、教育、宗教、法律、政治、経済、社会」の細かな問題の追求にうつつをぬかしている共産党員と学者たちのあり方を念頭においての批判的言説であったといえる。

「底知れぬ地獄の気配」を取り除き、「ウソ」と「ごまかし」のない指導者たちの出現を待ち望み、生きている「人間への愛」から発して「人間への愛」に回帰してくる「学問」のあり方を、直治は痛切に求めている。中野重治の「五勺の酒」にみられる主張と、「夕顔日誌」に表れた直治の信条には、相通ずるものがあるのは明らかである。

しかし、直治は自らの信条が青くさいものでしかないことも知悉している。自分一人の力などでは、世の中の動きを如何ともしがたいことを、自身の家の没落の過程から痛切に知らされた。「金が欲しい。さもなければ、眠りながらの自然死！」という言葉には、金が必要ならば生きてはいけず、一人の力などでは世の中の動きはどうにもならぬものだという直治の諦めにも似た思いが表れている。

千円の借金を解決せんとして、五円也。世の中に於ける、僕の實力、おおよそかくの如し。笑いごとではない。

ここにも直治の同様な思いが表れている。「笑いごとではない。」とは、他者から見れば「千円の借金」の解決に「五円」しか手もとにないなどということは、まさしくお笑いの格好の種にもな

るだろうが、直治にとつては、まさに生死にかかわる問題だ、ということである。彼は、生活能力の欠如や生きぬいていく逞しさのないことを自ら認識しており、たとえ「千円の借銭」があつたとしても、「五円」ずつ着実に返済し続けていつて完済していくような人間ではないことを知っているのである。

このように、直治は自分自身が何者であるのか、或は自らの弱さは何であるのかを認識して生き、そして自裁していく。「昨日のように今日を生き、今日のように明日を生きる」、自身の日常性に埋没したまま、習慣に身をゆだねて生きる人間たちとは異なる生を直治は生きていたといえるのである。

さらに、直治は「不良でない人間があるだろうか。味気ない思い。」と嘆いている。「不良」とは、公序良俗と呼ばれる世の中のきまりや常識に反して、或はそれらを無視して生きる人間たちの謂である。

直治は、麻薬中毒で苦しんでいた時期があつた。姉に薬を買うために金を無心したこともあつたし、それが姉の離婚の原因の一つとなつたこともあつた。明らかに直治は「不良」として生き、自ら命を断つた学徒動員帰りの青年である。

だが、世の中の公序良俗なるものや常識と名づけられた価値観が、不変のものであり変わらざるものかといえ、そうではない。戦中に聖戦完遂を叫んでいた多数の人々が、戦後はうって変わって、民主主義や、自由、平等を唱え出すという現象があつたことを見ると、公序良俗なるものや常識等が如何にあやふやなものであるかも自ら明らかである。戦後の各界の指導層の人々や、ジャーナリスト、イ

ンテリゲンチアたちにも、無反省、無節操な態度をとつたという別な意味での「不良」性があつたともいえる。

人間は、嘘をつく時には、必ず、まじめな顔をしているものである。この頃の指導者たちの、あの、まじめさ。ぷ。

ここで、直治が「指導者たち」の「嘘」を見ぬき、彼らも「不良」であることを見破っていることがわかる。

人から尊敬されようと思わぬ人たちと遊びたい。けれども、そんな人たちは、僕と遊んでくれやしない(傍点原文)。

ここでも、直治は「人から尊敬されようと思わぬ人たち」を「い人」ととらえていたことがわかる。「人から尊敬されようと思わぬ人たち」とは、「不良」と呼ばれる人々と無関係ではない。直治は、人を「不良」であると決めつける人こそが「不良」であると考えていたのではあるまいか。

このように、直治は健康な批評精神を持った「不良」青年として『斜陽』に登場してきて、戦後の日本と日本人のあり方を痛烈に批判しているのである。

#### 《注》

(1) 木村小夜「太宰治研究の現在——研究文献を紹介しながら」  
〔「國文學」 平成一一・六 學燈社〕三五ページ。



- (2) 饗庭孝男「本文および作品鑑賞」の「斜陽」の項（『鑑賞現代日本文学 第二一巻 太宰治』〈昭和五六・二 角川書店〉二六〇―二六二ページ）。
- (3) (注2) 前掲書、二六三ページ。
- (4) 中村三春「『斜陽』のデカダンスと『革命』——属領化するレトリック」（『國文學』〈平成一一・六 學燈社〉）九七ページ。
- (5) 『現代詩文庫 飯島耕一詩集』（思潮社）。
- (6) 「夕顔日誌」は、直治が「麻薬中毒で苦しんでいた頃の手記のようであった。」（第三章）と記されているが、手記の内容そのものは、戦後の日本社会や日本人のあり方を対象として、直治自身が思うところを存分に綴った文章として読みとることができ、『斜陽』が出た昭和二二年時点の読者へのメッセージとして、十分に喚起力をもっていることはいままでもない。
- (7) 筑摩書房刊『中野重治全集』第三卷。